

東部ロンドンにおける大学セツルメント活動

～not only money, but also friends.～

山 口 信 治

は じ め に

東部ロンドンにおける「大学セツルメント」即ち「トインビー・ホール」(Toynbee Hall)について頁の許すかぎり述べよう。だが、実際にトインビー・ホールに1ケ年余りレジデント(住人)として研修してきたものの、いざこれを他人に説明し、それを理解してもらおうと思うと、一瞬とまどったりしてなかなか説明できないものである。それはこのホールの組織体にあると思う。実にそれはナゾめいているが、頭がひとつ胴体が三つ、それに手足百本というからむかでを連想するからだろうが。即ち、ひとつの頭とは Toynbee Hall Council という評議会組織である。これはセツルメントの最高にして最大の決議機関であって、現在はブラッケンハム伯爵 (The Rt. Hon. Viscount Blakenham, OBE) を議長として最高監事に他3人、ランボール (A. S. Lamboll JP.), ムーンマン (Eric Moonman, M. P.), アプロベ (Ambrose Appelbe) とその下に23名の評議員から組織されている。次いで胴中の部分は、実際のプロジェクトなりプログラムを組織化する集団である。そのひとつは「館長・副館長」という胴体であり、しかもその下には「トインビー・スタッフ」と称する胴体の骨格とも称すべき部分がそれに続く、例えば Domestic Bursar, Account, Arts Workshop, Speical Families Centre, (Centre for Mentally Handicapped), Citizen's Advice Bureau, Appeals Department Maintenance, Senior Care and Leisure Centre, Legal Advice Centre, Bengali Health Advisory Service, Children's Country Holiday Found. Mallon Club……等々、ザッとこれらの下部組織をもっている。まさにこの部分は、つまりトインビー・ホールの主要なはたらきを意味しているところである。それにもうひとつそれらの業務を担う手・足がくっついている。即ち「レジデント」と称するトインビー・ホールに寝起きして直接セツルメント業務を担うレジデント集団である。であるからして、この化物を一言にして表現しかつ説明しようとする、先にのべた如くいがばかりかとまどうことになる。ここを訪れる邦国への人々への説明に無理が生じる。だが、ここを訪ねてくれる人々(実習生・体験生・見学生)のなかには「セツルメント」なることばを理解してくれる者にとっては「頭ひとつ、三つの胴体、百本の足」ということが、どうやら分ってもらえるようだ。

読者のなかには未だこのセトルメントなることばを耳にしたことがないという人々もいるかも知れない。しからば、この化物をどう紹介するか、これが著者の頭痛のたねでもある。

「×○ヨーロッパ福祉研修会」なる御一行様のために用意したことばは、「社会福祉のデパートです」ということばだ。結局、筆者の経験ではこれが一番理解してもらうのに適当なことばだということが分かったからだ。

さて、雑談はこのくらいにしてトインビー・ホールの中味について説明をせねばなるまい、トインビー・ホール、つまり大学セトルメント事業は一言でいって、その担い手レヂデント別名セッター (settler) が示す如く、ここに入植 (寝起き) している者達である。彼らはこの地域内に住む人々のあらゆるニーズに応えるための社会サービスつまり、人的資源となっていることだ。したがって、このレヂデントの館トインビー・ホールは住民に開かれた福祉サービスの提供の場 (helping-place or place of helping hands) ということになろう。例えば、人々のもつさまざまな問題解決のための相談ごとから、行政上の福祉手続きなど、ありとあらゆるソーシャル・サービスの人的資源がここには存在している。さらにその第2の特徴は、“not only money, but also friendship” が示す如く、その援助手段が金銭的・物質的な問題解決を指向するのではなく、優れてフレンドシップ、つまり友情という余りにもセンチメンタルでも受けとられる恐れがあるが、そもそもこの館が冠している「トインビー」はまさにこの運動の強力な推進者の1人であり、かつ東部ロンドンの貧民窟での「友愛運動」を組織し、尚かつその実践者であったアーノルド・トインビー (Arnold Toynbee—1900) の精神 (生活信条) を記念としたもので、それを活動の根本を示したものである。しかもこれはただのシンボルに止めず、いかなる時代にあっても、これを生活実現の根底として、人々とともに生きる社会的事実こそが、この運動の基盤となってきたし、かつまたなっていくと信ずる。

次いで、このセトルメント事業の特徴は「手づくりの福祉」ということだ、とかく、今日は全て科学化をシンボルとする時代、この中には手・足という人間の部分といえども入り込むスキがない程、科学化一べん党にさえなっている。したがってまた、社会的サービスもまた人手を離れて、従来の“helping”は形をかえ“request”つまり誰れでも手を出して“要求”しさえしたら高い福祉に無料であずかれるシステムにその姿をかえてしまっている。

したがってまた、これらの反省がまったくないわけではない。むしろ人はいふトインビー館の事業を評して「開所以来馬鹿のひとつおぼえのように (筆者) “not only money, but also friendship” を主張しつづけている」と、確かにそうも言えよう。だが、わたしはこの精神と言うか、トインビーの生活信条というかそれを信じ抜いている。何故ならばこの働き、あるいは運動と期を同じにしたオックスホード運動 (ムーブメント) つまりセトルメントは今日、館こそは変えてはいないが、その信とするところ残しておらず……タダの社会サービスの建物化としている事実をみるにつけ……たとえ時代遅れ、また時代に逆行するもの (時代に背けるもの)、時代錯悞等々と悪口を言われながらも歴然として、その姿をとどめ、その信たる高い理

想を求めて止まない運動と見たからこそ今回の留学はトインビー・ホールの見学や活動への参加を越えて、その信たるスピリット (spirits) を私個人の体験を経験にまで高めることにあったと言っておきたい。

したがって、この信たる “not only money, but also friendship” は筆者にとっては「隣人とはなにか、あるいは隣人とは誰か」の解答を意味しており、まさしく「古くて新しい課題」ということになろう。

さて、それでは一体、何が「古くて、新しい問題」なのだろうか、それを明らかにする必要がある。言うなれば、これこそ「手づくりの福祉」といえるからである。当然、この運動が起った時代1880年代は、貧しき群と彼らに施こしをやめなかった博愛主義者との間には越えぬミゾができ、このミゾを少しでもうめる活動がとくにこの時代に一度に開花した。たとえば、ドクター・バナードが然かり、シドニー・ウエブ然かり、住宅改善のために献身したJ. ラスキンやオクタビア・ヒルなど…故挙のいとまのないくらいだが、なかでも、ユニバーシティ・セツルメント (Universities Settlement) と呼ぶ産声をこの19世紀の英国にあげた。(夏目がロンドンを視察した17年まえの出来事)

少しくユニバーシティ・セツルメント即ちトインビー・ホールを理解するための要を補足してみよう。

東西のかべ：

まずトインビー・ホールの性格を明らかにしておかねばならない。このセツルメントの正式名 “Toynbee Hall, The Universities' Settlement in East London” だが、訳せば、「東ロンドンにおける複数大学セツルメント」となろう。そこでひとつ注目しておかねばならないのは「東部ロンドン」という地理もしくは場所である。即ち「東ロンドンにある大学セツルメント」で……の部分こそである。たとえばピーザントをして言わしめるならば、東ロンドンには「若人を育てる大学なる教育機関なぞ何ひとつない」処だったのである。では、何故このセツルメントをあえて「東部ロンドンにある複数大学セツルメント」と東部にアクセントをして強めねばならなかったのだろうか。ご承知のとおり、当時ここはドックに集まる荷あげ人未熟練労働者しかいなかったと言われる程、しかも連中はみな貧しかった。その不良住宅にむらがる様はピーザントをして言わしめれば、まさに“ホーロー”なものどしか映らなかったであろう。確かに彼の指摘した如く、彼らは教育を求めるほどの余裕のある人々ではなかった。「真黒になって親も子も働らき、酒をのみ、女をかい、ばくちにしか余裕のなかった連中で、ヴィクトリア朝のあでやかさとは何らかかわり様のなかった者たちであった」。

当時、大英帝国しかもその首都ロンドンはまさに、その名にふさわしく、経済の中心地であった。旧シティと、さらにもうひとつの顔、政治や宗教の中心地ウエストミンスター・シティの二つのバラ (Borough: 自治市) からなっていた。そこで、東部ロンドンは西即ち旧シティとウエストミンスター・シティを称して西のロンドン即ちウエスト・エンド (West End) と称しその西側 (ウエスト・エンド) の東側にあたる地区である。当時その大部分農村からな

り、都市に隣接した境界域をつくっていた。

と言うわけで、ウェストに対してイーストは唯単に東西南北の西・東を仕切ったものではなく実状から察するところ、その他もう一つの東南を感じずにはいられない。それは、これを境界にする物理的、いや誰の目にも一目にして区別のつく境いが存在した。旧シティの自由人以外はこの東から西へ、また西から東には自由に出入りができなかった。まさしくこの物理的な境いはローマ軍によってつくられた城壁である。高いけん固な石の壁によって、これは仕切られ、この城壁の内と外がいわゆる西と東のもうひとつの境界をつくりあげてしまった。物理的な城壁は敵の侵略から身を守る要塞つまりとりでを意味していたが、その内と外では内の安全に対して外の不安、すなわち無保障、さらには内の保障に対して、外はその圏外といった意味をもっていた。それにもう一つ、これは内ものと外ものという心理的な境界までつくりあげてしまったことである。

では、一体そうした心理学的境界を何故つくってしまったのかだが、イースト・ロンドンこのなかにはハックニー (Hackney)、ポプラー (Poplar) とくに、今回とりあげるトインビー・ホールの活動する地区ホワイトチャペル (Whitechapel) が位置していたが、これはあくまでも地理上の境いであって、社会的・心理的境界をつくるなにもものもなかったと言って良い。唯あえて言うのであれば、西の旧シティ (West End) に対して、東の郊外 (suburbia) といった程度で、むしろ、以前にはこの東部ロンドンの方が、大英帝国の政治的・行政的中心地となっていたことを証明するいくつもの記念が残されている。たとえば「マグナカルタ」といえば「民主的憲法」のシンボルの如くに評されるが、王が署名したのはこの地区ステップニーであった。その他、ノルマン時代にはビショップ (Bishop) がここにおかれていたくらいで、今日その名の残りとして「タワー・ハムレット」(Tower Hamlet) 村がそれである。

18世紀当時これらの地区を総称して「ステップニー (Stepney)」と呼んでいたが、この語の由来は実はノルマン語の “Stebbos Hythe” からきているという。つまり、今日流に英語訳にすれば “Landing-place” つまり「たび立ちの地」である。そのはず、ここテムズ河は面自然の良港であり、はやくより外国船の帰寄港として発達していた处でもある。

たとえば、すでに14世紀のロンドンは軍事・商業・経済の中心地であり、とくにロンドン・タワーは港の役割を担っていた。さらに時代がすすみ、16世紀から17世紀にはステップニーのさらに東の端に位置したライムハウス (Limehouse) には今日でもオープンしているウェスト・インディア・ドック (West India Dock) の入口部になるがライムハウス・ドック、これは世界に名を残す良港で、世界歴史に名を残した人々がここから多出している。その何人かはこのステップニー港から船出をしていることから理解できるであろう。例えば、13世紀の半ばにはサア・ヒー・ウイロービーやリチャード・チャムラーの2人がヒン島にむかっている。これが後に言う支那へのルート、ノース・イースト路をみつけることになる。また17世紀に入ると、キャプテン・ジョン・スミスが150ほどの乗りくみ員で無事ヴァージニアにつき、はつの植民

に成功している。今その一隻がテムズ河岸につながれ博物館としてサバイバルとしている「ディスカバリー号」がそれである。その他、メイフラワー号と言えば誰もが知るブリグリム・ファザーたち一行を乗せて太平洋を渡りマサチューセッツ州に向ったキャプテン・J. クックもこのステップニーに居をかまえ、ここから船出したところでもある。このように海に関するもの、港に関するもの、船に関するもの、さまざまな冒険者とその物語りがここにはある。

さらにいく時代かさか登ってみると、つまり13世紀、今からザァーと800年まえになるが、当時の王リチャード一世が世を治めていたが、ここ即ちステップニーで国会が開かれていたことが古い文書から分った。しかも、例の「マグナカルタの草案」がこの地で作られたというのであっては、大いに興味をそそるところと言わねばなるまい。決してはじめからへん境の地ではなかったこれでおわかりいただけたかと思う。

本稿は、そうした歴史をふんまえて凡を1世紀にも亘って運動がうけつがれてきた大学セツルメント事業を紹介しておこうと思う。

トインビー・ホール（ユニバシティズ・セツルメント

イースト ロンドン）の組織と事業

Toynbee Hall の正式名、The Universities Settlement in East London 大学セツルメントの組織について若干記述しておく、現在組織は、4つの各々独立した部門から構成されている。さしずめ大学セツルメントの頭に当たるのが、トインビー・ホール・評議会（The Council of Toynbee Hall）である。議長、以下セクレタリー、計理・財務委員会議長、弁護士各役職をおき、さらに23名の委員をもっている。（余談だがこの委員会の顔ぶれの中には日本になじみの面々は現在はいないが、つい3、4年まえまではプロフェッサーR.M.ティトマスがこの委員会のメンバーであった）。

この下部には実際の大学セツルメント業務や企画するスタッフが館長以下17名の職員をかかえている。現在部局は下に示した通りである。（（ ）の中の数字は職員の数を示す）

1. 館長：Acting Warden (1)
2. 住人課：Domestic Bursar (1)
3. 経理課：Accountant (1)
4. 絵画活動部門：Art Workshops (2)
5. 精神障害部門：Centre for Mentally Handicapped (4)
6. 老人ケア・レジャーセンター：Senior Care+Leisure Centre (2)
7. 市民相談部門：Citizens' Advice Bureau (2)
8. 営繕課：Maintenance (3)
9. 館長秘書課：Warden's Secretary (1)

さらに右の部局の下部にトインビー・ホール、1884年イーストロンドンに開所以来レジデントをトインビー・ホール中に寄宿させるレジデンタル・セツルメント（コミュニティをつくること）形式を特色としてきた。ただしトインビー・ホール内に寄宿するレジデントは、上記の評議委員会によって選ばれたいわば選良（エリート）たちである。彼らが直接イースト・ロンドン（トインビー・ホール）に入植して諸々のセツルメント事業に参加することを入植の条件としている。このアイディアはセツルメントの生みの親キャノン・バネットのセツルメントだましいと言っているだろう。それが今日もお生かされている。したがって選ばれた選良たちの要件は、ただ単に人格・品性においてイースト・ロンドンに居住する「文化」をもたないやから（Stepchildren of the culture 文化のまっ子）へのよきモデルであるばかりか、そのレイチャ・カルチャーの良き伝達者でなければならない。加えて博愛主義（ヒランソロフィスト）者、また熱心党（エンサージェニスト）と呼ばれる性格の持ち主であることが要求される。彼らは24時間拘束され住民と一緒に生活するということが要求される。

しかもこの伝統は今日も尚受継がれ、それを組織してボランティアとしてコミュニティー・ワークを担当している。ここにこそ彼らのイースト・ロンドンへの入植と同時にレジデンタル・セツルメントの特徴をいかに発揮している由縁がここにある。

彼らは、先きに挙げたいくつかの部局の下に配置されるかあるいはその年度のプロジェクトに参加することになる。トインビー・ホールを訪れるクライアントらの必要を充たそうとするものである。

ところで、彼らのトインビー・ホールでの寄宿は先きに述べたが、その理由はボランティアとしてのコミュニティ・ワークに参加するためである。このレジデント・コミュニティの経験は将来この方面のエキスパートとして進出しようとする者にとって貴重な体験をする生活の場（コミュニティー）となる。したがってここでのセツルメント事業への参加や体験は、個人や家族のニーズについて学ぶことが出来る。またその機会に恵まれていることだ。勿論そのための技術を身につけること、苦悩するクライアントとの問題解決の場に参加することによって、まずもって問題をもつ「人間」を理解することになるであろう。

このボランティアによるセツルメント事業が引き続き社会から要請され、事実、多くの助けに、あるいはまた各種の複雑にして多様化するクライアントや社会のデマンドにこたえている良き証しとなっているところだ。

また、このレジデントセツルメントを利用する地区の住民へのサービス唯単に問題の解決に止まることなく優れて、今日も尚、19世紀のアイデア “not only money, but also friend” の不朽の精神として住民の目に映っていること特記しておかねばなるまい。事実、彼らのこれらの地区にあってあますところなくこの精神を生かした “good work” として地元へ貢献していることがよく分かるであろう。

しかも彼らが告発して止まないものに

1. 誰もが働き、誰もがこの人生の学びができること
2. 全てのボランティアによるコミュニティ・ワークが全て無報酬で行なわれるべきことなどを挙げられている。

セツルメント事業の特徴がレヂデントの人間的感化（ヒーマン・インフルエンス）、もしくは人間的影響にあることは先きに示したが、個人のもつ道徳（倫理）的な知性を必要十分なる条件とした。しかもこれがそれを幹とするところの「elevated principle」や「sound sense」となっていることだ。ただ、だからと言ってレヂデントの全員が、上記の選考規準に合致する者ばかりかだとは言えない。むしろ栄光ある生活（privileged living）の条件を満たさぬ者も少くない。大学を卒業してこの計画に参加する青年たちは、若干18才～22才という青年たちで、その人生の経験からして青年として悩み、自らが数多くの問題をもちながらトインビー・ホール・セツルメントのレヂデントとなり、各々の社会的・経済的経験を異にし者たの集まり、つまり、第三のコミュニティを形成してここでの人生の経験と訓練は、地域への力となり、また地域内の問題解決のために提案された実験的プロジェクトを強力に進める力となっている。

だが中には、勇かんでしかも熱心党の結果しばしば、うつめ傾向になってしまうことさえある。つまり彼らの精神病院でのボランティア活動の経験からくるもので、いうなれば施設病（ホスピタリズム）といっていいいであろうが、患者たちの苦痛を一身に受けるためであろう、ままた彼らの中には自ら選んで飛び込んできたセツルメント事業が両親の同意や支持が得られなかったりして、何らかの制限があって十分に成長することのできなかった青年たちがいる。彼らはクライアントとのカウンターフェレンスにおち入り、にっちもさっちもいかず、結果うつ向きかげんになってしまうことさえある。そうして彼らは自身将来についてははっきりとした人生観や社会観もさらにはそうした確信などを欠くことにより、仮りにトインビー・ホールという第三のコミュニティにその居住寄宿が許され、それが快適であっても生気をなくしてしまう者が少くない。

そこでこのレヂデント・コミュニティの計画はあくまでも half-way house が治療的コミュニティとしてではなく、むしろ優れて他からの支持によってそれを越えてゆくところにあると思う。時にはレヂデント・コミュニティに住む者同志のいさかいを起こすこともあるが、また同時にこの第三のコミュニティの仲間からの支持や援助により問題を解決することも少くない。この人間関係の妙味を理解するに至り、参加してこれを支持する力となっていることの事実が、このコミュニティの最大の特色となっているところだといえる。

では、概略この第三のレヂデント・コミュニティの事実のいくつかを紹介し、彼らの役割を述べてみたいと思う。参考のため、大きな変化をみた1970年、1972年、それに1976年の年会報（Toynbee Annual Report, 1976）より筆者なりに整理してみた。

まず、1970年の報告には4つの部門と、さらにその下部の事業に分かれている。即ち(1)老人部門、(2)青年部門、(3)コミュニティ部門、(4)教育と芸術部門である。

また、1972年の報告では先きの対象別・部門別ではなくカテゴリー別による分類を採用して、以下のような6つの部門に分割している。

即ち(1)教育部門、(2)アドバイス部門、(3)精神障害部門(4)さらに(1)と(2)の部門にはいくつかの下部門に分けている。(1)の教育部門には

- a. The Senior Care and Leisure Centre (老年ケアと娯楽センター)
- b. Arts Workshop (芸術ワーク・ショップ)
- c. Literacy (読み書き・学習会) の3つのプログラムが、

(2)のアドバイス部門には

- a. Citizens' Advice Bureau (市民一般相談)
- b. Money Advice (金銭・就労・相談)
- c. Legal Advice (法律相談) 等々3つのプロジェクトとなっている。

ところでこれらの部門で、レジデントたちの役割は大きい。大半はヘルパーに、ある者はトインビーの新しいプロジェクト・チームのディレクターであったり、組織委員会の議長やマネージャーを担当している。ときには開設している学習会の校長等々といった重要な役職をつとめ、その責任を分担している者が少なくない。

さらに4年後の年会報では若干筆者なりに整理したので参考にしてほしい。凡そ11の群(部門)からなっている。

1. 基本基金群 a. Wates Foundation, b. Attlee Foundation, c. Disablement Income Group (D.I.G. Charitable Trust: 障害慈善基金)。
2. 教育群 a. British Educational Equipment Association, b. City and East London College,
3. 文化・教養・レジャー群 a. The Toy Libraries Association (おもちゃ図書館), b. Toynbee Art Club, c. Curtain Theatre (演劇活動), d. Marron Club (老人クラブ), e. Scottish Dancing, f. Toynbee Dance Studio
4. 障害群 a. Association For All Speech Impaired Children (言語障害センター), b. The Centre for the Mentally Handicapped (精神障害センター)
5. 社会治療群 a. Alcholics Anonymous (禁酒友の会), b. Social Services Family, c. Society of Friends', d. Friend & Neighbours Service (Stepney Old People Welfare Trust: 友愛訪問)
6. 保育群 Gatehouse Pre-school Playgroup
7. 人事相談群 (アドバイス), Legal Advice Centre (法律相談), Marriage Guidance Council (民法改正による結婚・離婚相談), Citizens' Advice Bureaux (一般市民相談)
8. 医療群 Mass X-Ray Unitts (集団レントゲン診査)
9. 住宅群 Toynbee Housing Society (トインビー住宅供給協会, 不良住宅一掃活動)

10. スカラーシップ群 Chown Music Scholarship

11. レジデントコミュニティ群 (トインビー・ホール住人組織)

以上、最近の傾向をかいつままで述べたが、最後にこうしたセトルメント事業の内容の多様化により、このレジデント・コミュニティのメンバーも毎年秋には大きく変わることになる。つまり、夏大学を出て新しくトインビー・ホールのレジデントに選ばれた者、その他の新しいグループがトインビーに入居して新しくレジデント・コミュニティを組織するからである。

ここでレジデント・コミュニティの最も特徴とするところはそのメンバーの流動性にある。年々これが上向きわげんになってきていることだ。例えばトインビー・ホール・ユニバシティ・セトルメントは、レジデンタル・セトルメントであることは先程述べたところであるが、この館に長期にとどまって同館のプロダクトに参加でき、その経験を生かし、様々なプロダクトに貢献している。同時にそれは流動性のまんねり化を防止し、ときには大事なボランティア・ワークに活気をなくしてしまうことを一掃してくれる。ときにはおこりやすい個別化を忘れてルーティーン化してしまう恐れさえ生ずる。そのためにもレジデントの長居、長期化による日常業務の劣りがないよう調整する必要がある。その意味ではここ数年間、新旧の交替が順調にかつ健全に行われてきていると言っている。

トインビー・ホールは50余名のレジデントらを収容する施設をもっている。これは相当大きな世帯であるが、唯単にグループや規模が大きいというだけでなく、優れてその変化に富んだ資源ということになる。とにもかくにもこのレジデント・コミュニティの年令にもかなりの開きがある。改革上の意見や宗教上日かげなる意見も出はじめてきている。こうした時節がら再びトインビー・ホールが直面し、その実力を発揮すべき問題を擡頭してきている。つまり racial mixed が地域の特徴だし、それに関する民族同志あるいは白人・黒人等の民族問題・人種問題などを頻発するに至っているからである。

レジデント・コミュニティを形成するメンバーもかつてトインビー開所当時のように全てが両オックス・ブレッジ(オックスフォード・ケンブリッジ)両大学の卒業生によってまかなわれた時代とは凡そ事情を異にし、いろいろな大学の卒業生、それに様々な専攻の学生、政界行政に従事しているもの。さらにはまた町の工場や商店で働く労働者を含めてレジデントとして選び、これらのさまざまな人々の混合からなり立っているのもこのレジデンタル・セトルメントの特徴である。

彼らは凡そ月一回の定例会 (monthly grand meeting) と 隔週の小集会 (small weekly meeting) に参加する。盛んな意見の交換の場であり半ば参加が義務づけられている。ミーティングにはそうした地位、階層を異にするレジデント・コミュニティのメンバーを母体としたボランティアが協力して、セトルメント事業をすすめるための真剣な討論が行われる。

ところで、このトインビー・ホールに集まるボランティアに共通してみられる要素は、どん

な種類のボランティア・ワークにも喜んで、しかも進んで参加し協力していることだろう。しかもトインビー・ホールがプロジェクトするセツルメント計画に、自らの関心をフォローし、またその技能を余すところなく発揮する機会がすべてのレジデントに開かれている。彼らはこのワークを通じてその喜びや経験を得ている。改めてこうした時代が変わっても、その祖、サムエル・バーネットの確信して止まなかったセツルメント精神を理想とし全ての市民に学習の場を提供する運動と、またその新しいアイディアの試行の場となっている。ここにレジデント・コミュニティの価値や意味づけが存在していると思う。

B.I.G (Disablement Income Group and DIG Charitable Trust)

D. I. G. とそのチャリタブル・トラストは英国における全障害者を対象とした活動の拠点である。彼らの経済保障はもとより、広く社会復帰のための福祉全般にわたる増進を目標にプロジェクトされた組織である。またD. I. G. は法制上の改正をめざしている推進団体でもある。つまり、同チャリタブル・トラストはそのための基礎調査を実施し、これに基づくところのプログラム教育と具体的な援助的サービスを実施するもので、「全ての障害者に自由かつまたその活動を制限するものではない。」というモットーをかかげて活動している。

1976年のはじめ、はつの危機的な問題をかかえてしまった。それは資金問題であり、完全に底をついてしまったからだ。その結果、それに関係する諸々の事業までも継続することがあやぶまれ、事務所さえ恒久的にそこに置くことさえむつかしくなってしまった。

とりあえず最初の年の上半期はトインビー・ホール内にその事務室を移し、また資金の面では「アトリーファンデーション」(Attlee Foundation. アトリ基金) がそれに当てられ細々と通常の事務を遂行してゆくことができるに至った次第である。現在 D. I. G. はトインビー・ホール敷地内のアトリー・メモリアルハウスの中に恒久的な事務室をもち、それに関する一斉の事務と業務とを行なっている。今日ではそうした一応の組織上の問題は解消し、再びこの方面の熱心な社会サービスが実施されるに至ったことはうれしい。

そこで2, 3その主な事業内容を紹介するが、その一つは何といっても Advisory Service つまり、もろもろの障害ゆえに生起する相談事業でこの作業量は急増一方である。これは今日トインビー・ホールのセツルメント事業の重要さをさらに認識すると同時に、反面いろいろな困難な問題を背負い込むことにもなった。その一つは不幸なことだが、障害をもつが故に増々貧困に追い込まれ、またその手かせ、足かせのとりこになっている貧困を余儀なくさせられている障害者を守るため何らかのアドバイスを与えたり、また、具体的な援助をすることである。

二つ目は、D. I. G. の貢献としては“ABC of Services and General Information for Disable People”なるガイドブックを挙げることができよう。これはすでに需要をまかない切

れず、1976年の末にはその第三版を増刷した程である。ところでこのガイド・ブックは障害者のための各種慈善団体や施設職員に理解しやすいように編集した一種のエンサイクロペディア（こと典）である。他にそれに関連した法令集やボランティア組織（グループ）などの詳細な一覧表をつけて編纂されている。

次いでその三は、このD. I. G. の調査研究についての紹介になると思うが、1976年にはこの調査研究のプロヂェクトを実施している。その一つは、2年越しの研究課題で主としてケース・スタディを扱ったもので“Extra Costs of Disability”について、さらにもう一つのそれは、直接障害者に関連する問題で、障害者と慈善組織との間に生ずる“anormality”（差別）つまり異常な関係を調査したものである。幸い York University でもたれた学会で“Financial Provisions for the Handicapped”のセッション部門で“Action Research for the Crippled Children”がとり挙げられ、調査の成果が報告された。引きつづいて盛んな議論がわき、なかでも、特に強い関心を示したのは E. E. C. の諸国やスカンジナビアなどで盛会のうちに会を閉じた。

さらに国内の反応としては、

1. The Occupational Pensions Board
2. The Royal Commission on the Distribution of Income and Wealth
3. The Royal Commission on the National Health Service

などがつぎつぎと組織され、障害者に対する対策がなされるに至った。これなどはまさしく、トインビー・ホールでの調査研究、つまりユニバーシティ・セツルメントの社会的貢献の一つとして、開所以来伝統としてもち続けたもので、今日でも尚かつ立派にその役割を果たしているといつてよい。

その他、D. I. G. には The Department of Health and Social Security をはじめ、その他の法令やボランティア団体とも連絡を密にとって障害者のサービスに最善を遂している。さらには、定期的なM. P.（国会議員）との会合をもって意見の交換をして行政を担当する彼らにも障害者の問題、特に今日ではその経済的保障にあるが、障害故に彼らが直面する数々の困難問題について意見をかわし合っている。こうしたミーティングを通じて障害者問題に関心を持ってもらい、特に先に挙げた特別な保障の必要とその法制化の有力な推進者になってもらうことをネライである。そうした不断の接触を通じて、つねに障害者の問題を論じ、かつ、そのための対策を練る場としてオープンされているところに現代に開かれている、ユニバーシティ・セツルメントの意義があるのではなかろうかとさえ思う。

トイ・ライブラリー協会 (The Toy Libraries Association)

このトイ・ライブラリーなるものは、我が国では未だ聞かぬが、「おもちゃ図書館」の組

織協会である。これは社会的な関係から絶縁されがちな子供達を対象としたもので、端的には「障害児」ということになる。したがってそうした子供達へ何らかの(something)機会を提供しようというのがそのネライである。ところでこの機会の提供というトーイ・ライブラリーの原理は「いかなる人間にも等しい機会」という実験教育学から出てきたものである。そのはず仕事に担さわる職員たちは異口同音に言うことには「機会を与え、それ動機づけることは身体や精神の発達に欠かせない人間発達のエクスプロラー」だと、つまり今日言う「発達理論」的接近法だが、まず社会的ニードを基本的人格の中にしっかり組み込むための時期に、そうした機会が恵まれなかったために起こる障害、それを出来るだけ取り除こうとするものである。したがってこの初期の無刺戟が、多分に子供達の生活の安定にとって障害になると考えていることだ。この刺戟のなさが、例えば読むこと・理解すること・教えること・それに意味づけ、(アレは何に? コレは何に…?)などの人間としての基礎的な生活技能を著しく貧弱なものにしてしまう恐れがあると彼らは考えている。

そこでトインビー・ホールが提供するサービス「トーイ・ライブラリー」はまさに彼らに、つまり特に障害を持つ子供達の self-confidence や self-awareness などを助け、それを力づけるものだといえることができる。

しかも、これは単に障害を負った子供にのみ限るのではなく、彼らを生み育てている両親への援助でもある。つまりおもちゃを与えることによって子供の発達に気づかせ、一層の関心を向けさせることが出来るようになることだ。しかも彼らの目を単にどんなおもちゃがあるのか、どんなおもちゃがこの期の子供に必要なかといった興味をわかせ、おもちゃについての知識を広めるばかりか、すぐれて子供らへの理解へ向け、親たちの考え方が次第に変わっていていることに気付かせることだ。そうして、ついにおもちゃを買い与えることの経済的負担よりも子供達の助成発達に欠かせないものが何であるかに気付いてもらうことだ。ここ例示した如く、とかく親達はトーイ・ライブラリーを知るまでは、おもちゃのも教育的な価値を理解している者があまりにも少ないということだ。従って、それへの理解を高めること、さらにはその理解を通じて、子供達の成長に関心をもつこと、そうして、親がおもちゃの役割を演じて子供と遊び興ずるということが出来るようになればしめたもので、同時にこれが子供達の知能の発達に欠かせないばかりか、子供達の心、つま情緒を豊かに育てること、逆にこの理解に欠けているために子供達のそうした特性をついばんでしまうことを警告しているのである。

はじめにトインビー・ホールでこの計画、つまりトーイ・ライブラリーを開始したのは1973年である。8年になるが、現在凡そ20名のボランティアがこの仕事に協力している。しかもこれを利用している子供達は、18ヶ月の赤ん坊から14才の最年長者まで、凡そ40名ほどがこのライブラリーを利用している。原則として、このライブラリーに来てこれを利用することだが、この要件を充たし得ない事情にある子供達へは、各家庭を訪ねて、トーイの交換をする。また両親には月に二度センターに集ってもらい、学習会をしたり、あらゆる相談にのったりして、

もちろんこの計画の協力者にはトインビー・ホールのレジデントらが参加するが、まず問題をかかえた多くの親達があつまり、こうした子をもつ親同志の話し合いの場を提供することからはじめる。様々の社会資源への情報の交換、さらには、この共通の問題への関心を通じて相互に扶助し合うような集まりへと会を進展させてゆく。ついにはこうして会の親自らが立ちあがり自身の経験を生かす場を求める。ベテランたちは新しく施設を訪れた者へのオリエンテーションを自らかつて出たり、積極的にこの会への参加を呼びかけたり、様々な問題を取り扱うようになってくる。次にそうした活動を通じて仲間のネット・ワークを広げ障害の子供をもつ親を勇気づけたり、親自がすすんで子供の成長に前向きになるよう援助するようになると、自ら子供の成長のための専門の施設に連れて出るようになる。

こうしたトーイ（おもちゃ）を介して子供と親・それに親同志、さらにはこの親とトーイ・ライブラリーを持つトインビー・ホールとが結びつき、最終的には適当な社会施設とコンタクトを結びつけることになる、即ち適切な治療をうけることができるのである。しがたってボランティアはこの親と子との関係をまずつくることに努める。したがってこうしたおもちゃの交換のための家庭訪問を通じて、彼らの人間関係の調整をすることになる。ここに彼らの最大の役割があり、この関係調整を通じて次第に子供の関心に注意するようになり、おもちゃの教育的役割をもち、これへの関心を高め、子供達のこのおもちゃへの関心を観察したり、またその観察の記録をとることに興味を示したりするようになる。しかもこうして集めたデータが子供達の発達に重要な資料となることと自ら学習することになり、そのことの意義を深く洞察するに至るボランティアはどんなおもちゃをどんな風にして使って遊ぶかを観察するが、それは今後のプランニングに役立つのである。このボランティアの訪問を通じて家族はさまざまな子供の行動の観察から喜んで情報を提供してくれるようになる。

しかも変化しつつある親の態度は子供への受容態度にも変化を与え、強いては子供の情動性に著しい発達をあたえることになり、広く寄与していることに気付かせることになる。

勿論、家庭訪問によって親の態度変様はトーイ・ライブラリーをもつセンター（トインビー・ホール）でもボランティアによって続けられているが、ライブラリー内での子供の観察の記録を通じて親とのコミュニケーションを一層深めることが可能となる。また子供のおもちゃへの関心と行動の観察から親と子の関係を診断し、適当な助言を試みることも可能となる。

こうした働きを通じて先にも述べた通り、単なる親同志のコミュニケーションの交換だけに終わらず、問題をもつ親同志の意見の交換や体験談をまじえた情報の交換が大きな親の自立を助けていることになり、無視出来ない重要な役割の一つだが、それを超えて子らの発達、成長に関するグループ・セッションにまで会を発展させて、その成果がこれを専門とする科学者への重要な資料を提供することになり、より一層の関心を拡大し、その重要な役割を改めて認識するに至る。

1976年のデータによると、このトーイの利用度を指すものとして、年間延べ400を超える報

告を得ている。したがって T. L. A. (The Toy Libraries Association) はさらにおもちゃの利用度が増え、それに見合うようなおもちゃを整備する必要が出今日それを備えつつあるのが現状である。

さらに同協会は、これまでの経験を生かして障害児を考える連続の講習会ないし学習会を準備し実施してきている。1977年には年間行事としてそうした2コースを実施してきた。

また、最近出版した書物による活動をも挙げねばなるまい、現に6つのシリーズが出来上がっているが、その中のいくつかはすでに出版され、その方面はもとより各方面からの賞賛を拍している。“I Can Use My Hands”, “Encouraging Language Development”, “ABC of Toys”

さらにこうした活動が国内のみに限らず、今年(1978年)自3月30日至4月2日にはロンドンにてトイ・ライブラリー協会主催の国際学会が開催された。(機会があればこの会に出席した様子をも紹介してみたい)。

アートワークショップ (Arts Workshop)

トインビー・ホールにおける Arts Workshop の歴史はかなり古い、戦後、一時中断していたが1975年以来再開することになった。年々指導者やその専門家、さらにはボランティアが整い、かなりの成果を上げるにまで至った。このセツルメント事業は、主にトインビー・ホールの近隣の子ども等、つまりコマーシャル通りをはさんだ東西に住む地区(主にベンガリー語を話すこどもたち)の子ども等を対象にオープンしているワークショップである。

このねらいは、この地区の子ども等に芸術(Arts)を実際に経験させることである。とくに5才から11才までのこどもたちを対象にしたものだが、これは教育的発達、つまり人格の形成にとって芸術活動への参加がきわめてベーシックなパーソナリティに関わるものという理解から出発したものである。

現在、50余名ほどのこども等が集って活動しているが、このワークショップを再開したもうひとつの理由は、先述した土地柄であろう。ここは、つまりこどもの発達にとって決して好ましい環境ではない。地区内にはロンドン最大の生鮮食料品の市場(スピタルフィールドとベチコートレーン)をもっている関係上、これに通ずる主要幹線がコマーシャル通りとホワイトチャペル街通りであり、その輸送路として極めて重要な役割を果たしている。従って、ひっきりなしに往来する大型トラック、さらにその騒音などは活気ある町の様相を一面もっている。それに関連して建ち並ぶ事務所・会社や倉庫など大きなビル群がギッシリと隣立している。その間をねうように立ち並ぶにぎやかな商店街に、オフィス・レディでにぎわうオフィス街など、さらに中小工業の町と顔をもちさまざまの活気を呈している。ところが一方、こども達にとってこの町は自由に使える安全でしかも健全な遊び場というもの何ひとつ整備されていない。いきよいこどもたちはこのビルやオフィス街の谷間(ストリーコナーズ)にふきだまりのような

小島をつくって集まり、健全な遊び場から疎外された子ども達がたむろすることになる。それがギャング集団の巢窟ともなり非行アイランドをつくりあげてしまっている。とくに彼らの下校時が問題のようだが調査の結果明らかにされたところでもある。

したがってトインビー・ホールはこうした地区の子どもを対象ホールの施設を開放して、彼らにアート活動の場を提供している。これには数人のボランティアや指導者をおき、活動が活発にできるようにしている。この試みは子どもはもとより親達にとってまさに光明となったことはあえて言うまでもない。

さらにもうひとつこの地区の特徴は70年代の後半、東南アジアから大量の移民が移り住むようになった。それに伴って様々な社会的不適応がしばしば社会問題 (social question) として、市(バラー)の最重点課題として対策を協議してきているところだ。これに対してトインビーホールは地元のこれらの子どもと、新参者(よその)のアジア(バングラディシュ)の子どもとの交流の一助としてこれを通じて文化的かけ橋の役割を果たしてきた。このことも忘れてはならないものの一つであろう。

したがってまた、このワークショップが、子ども達のぶらつきを少なくしたばかりか、優れてフレンドシップをつくるセトルメントの伝統にある隣人運動としてこれらのワークショップが機能している点で特筆しておかねばならないことだとおもう。さらにはまたこの原理に基づいた様々な活動の領域を広めることも可能だろう。例えば、子ども達が選ぶ題材はまさに彼らのこころの投影(プロジェクト)であって家庭環境、家族、仲間のこと、学校の友達、ファンタジー等々をそのキャンパスや活動の材料にぶつけてくるからだ。したがって彼らと直接接するボランティアたちは、彼らのワークショップへの行動を観察することにより、また出来上がった作品を通じて、様々なこころの写しを読み取ることが出来る、それによっては必要な助言を与えることが出来るそんな機能をも兼ね備えている。

まずもって彼らがここを利用することによって得られるものは、ものを創り出すことのよろこびにある。つまり創造への参加が彼らの家では著しく疎外されているしその欠如が彼らの人格をつくる上でマイナスとなっている。だからと言って、ただ単にこの学習(ワークショップ)は子ども達にその技術のみを教え込むのではなく創造の目を開かせそれを育てるこころにある。つまり、オブジェクト(静物体)を静かにありのままに見る目やそうした態度を涵養することにボランティアたちの指導が求められている。しかも、同時に子ども達を取り囲んでいる環境をここで養なわれた目で見、かつまた大いに疑問をもち、しかもそれを画材として学習するといった方法へと展開する。かつて我が国の東北地方で起った「つづり方運動」のような一種の社会教育の方法を取り入れた学習と言えよう。こうしてもものを見るといった生活の態度は、さらにはそのワークショップで直接それを創り出すという経験は、彼らに強い意志の力を養ない育てることになる。強いては「よみ・かき・そろばん」のような移住民の基礎学習の一助ともなっている。

とくに、このワークショップは、先に述べたような事情つまり英国とアジアの子ども達のフレンドシップをつくり出し、よき人間関係を学ぶところでもあり、そのための協調性と相互理解を高めるための活動であるため、より優れたグループワークの機会を多く体験出来るようにプログラムがつくられている。例えば、76年より続けている活動の一つに、ワークショップのなかにパン粉を使って、あらゆるアートを、つまり様々な形を創造するよろこびを味わってもらう活動を続けている。しかも実際にそれを焼いてそれを試食もする。こうした創作活動は色々な道具の機械を使うことになる。またそれらを使う知識が必要だし、充分にそれを使いこなすための訓練を受けることになる、時には町のパン屋の工場に見学に出掛けて、実際にパンの出来る工程を見学、実際に職人から手ほどきを受け、ホールに持ち帰ってその経験を生かすことになる。この経験は子供らにワークショップとしてパン工場の模擬店をつくることになる。メンバーが協力して紙や粘土を使って、さらに仕上げに色をほどこして見事なほどの工場や店をつくる。時にはそうした共同作業中、子どもの奇想天外な力を発揮することがあるし、また時としてファンタジー・プレイなども起るが、それなどに全員が問題解決に対処するところから次第々々に、相互のこころにいていたステレオタイプや偏見等々がとれ、相互理解が可能になる。このワークショップを通じてフレンド・シップが出来上がってゆくのはまさにそうしたグループ活動が一助となっているといつて少し過言ではない。

なおプログラムも出来るだけ地元の産業（ハンディクラフト）や伝統に密着したものを選んでそれを同時に学習するようにしている。ところで次の大きなプロジェクトをワークショップとしてはスピタルフィールド・プロジェクト（Spitalfield Project）と称するものであるが、この地区に根ざした伝統的なハンディクラフト（やきもの）を学習するための計画がすすんでいる。最下このプロジェクトはかまを購入するためのキャンペーンを実施している。これなど子ども等に新しい目を開くことになろうとおもう。

こうしてトインビー・ホールのセツルメントの意義は、単に場所を提供するだけではなく、子ども達の創造と一緒に参加することによって「共同の生産・共同の分配」という苦しみも喜びもともにするといった人的資源を提供し、その媒介（メディア）となっていることだろう。ときとしてこの資源は、単にものを創る道具をマスターすることだけに止まらず、この道具と創造とのルール、つまり、しつけにも関わりをもつだけも取り入れる。例えば、作業後の後片づけなど、ややもすると家庭はもとより学校でもあまりやかましく言われない生活のマナーが、ここでは職人から、たましいとしての道具の扱い方、後始末などがきびしく仕込まれることもこのワークショップの副産物として子ども達の人格形成に大いに役立っていることと思う。

さらにもう一つ、この活動を運営する基金だが、これにはG基金(Gulbenkian Foundation)が備えられている。このファンデーションは同時に、この種のワークショップのメリットに関わる調査研究にも当てられており、調査の担い手たちはみなボランティアたちだが子ども達との共同のワークショップに参加しながら、子ども達とスタッフの間に起った態度の変化や成長

などを観察し、これを記録するという利点をもっている。

アドバイス・センター (Toynbee Legal Advice Centre (TLAC)
Toynbee Citizen's Advice Centre (TCAC))

トインビー・ホール、つまりユニバーシティ・セツルメント事業の特徴の一つはこれから説明をしようとする「相談事業」にあといっても過言ではない。

開設はほぼ、トインビー・ホールのオープン以来にさか登ることができるほど古い事業のひとつだ。正確には1898年にスタートしているので、以来80余年の歴史をもつ伝統的な事業の一つだといって良い。この伝統は今日でも尚かつ受け継がれ地域社会の住民の様々な要求にこたえている。

さらにこの「相談事業」は大きく二つに分けられるが。その一つは、トインビー・リーガル・アドバイス・センター (Toynbee Legal Advice Centre T.L.A.C.と略す) であり、もう一つは、トインビー・シティズンズ・アドバイス・ビューロー (Toynbee Citizen's Advice Bureau (T.C.A.B.)) である。前者は主として法律に関する相談を対象とするのに対して、後者のそれは、むしろそれに類した諸々の相談を処理するためのもので、一応の業務上の区別があるものの実際にはより厳密な区別があるわけでない。むしろ、二つの窓口を通じて問題の内容に応じてセクションを分けているというのが実情のようだ。勿論、二つのセクション(窓口)ともにトインビー・ホール内に設けられている。

さて、これらの窓口相談に来るクライアント(来談者)だが、ここではむしろ来談者に使うことばが統一されているように思う。なぜならば公に刊行する出版物には必ず“Caller”(来談者の意)が使われているからだ。ではその来談者の持ち込んでくる相談むしろここでは問題と呼んだ方が適當のように思うが、英語でもこれは必ずしも一つではない。概して来談者のニードということになるが、時にはクエッション (questions) であったり、リクエスト (requests), デマンド (demands), あるいはまたウオント (want) と言ったりもする。つまりこの窓口を持ち込まれる相談というのはもろもろを意味しており、持ち込む来談者にとってはその苦痛を出来るだけ早く取り除いてほしい (help in getting requairs), せっぱつまった難問で、しかも最優先せねばならない重大事ともなる。

もう少し、その彼らがそう思い込んでいる重大事を整理してみると、凡そ次のようになりかと思う。当然この窓口の性質上、法律もしくはそれに関わる一般(民事)もろもろの問題だが、量・質ともに第一位にランクされる訴えは (complain) である。次ぎが苦情・不平あるいは病気などの訴えを含んだもの (complain) となる。前者はまさに契約関係から派生した不法な扱いから生じるコンプレックスだし、主に “contract law” に関するものであり、具体的には耐久消費財などの購入をめぐる売り手・バイヤーとの契約上のトラブルであったり、また、住宅・光熱器具・車その他もろもろの物の貸賃借上発生したトラブルであり、後者の「物」に対して「人間関係」が問題になっておきたコンプレックスや絶望的な状況を呈するに至った

問題で、主として彼らの不平不満 (complain) は、家族や近隣の人々との「もめごと」であったり、「十分なる公的処遇の受け入れの喪失」、また、その「拒否」、とくに家族や近隣・地域社会からの「拒絶」であったりもするいわゆる疎外がそれだ。

次いで窓口での共通の特徴は、ノーマディック、つまり、どこからも受け入れられず、ついにあちこち自分を受けとめてくれる適当な場所を探してさまよい歩く人々となっていることだ。つまり彼らにはその望みさえ喪失して、おそらくこころも駄目、あそこもダメと受け入れてくれるところがなかったり、話しをも聞いてくれることさえあるまい……と信じ込んでしまった人々だ。

それにもう一つ、二つここを訪れる来談者の来所の目的が、先に挙げた訴えや不平不満ではない者で特徴のあるものは、いきなり金をせびりに来る者 (beggar) たちである。これは決してその量からいって少なくないことを附言しておきたい。さらにはまた具体的な訴えや不平不満、それにもう一つ、かりに人間への不信としておくが、また金でもない、ただ窓口に来て黙りこけてしまって来所の理由を明かさない、むしろそれさえ出来ない状態にまでおちぶれてしまったいわゆる無気力な者たちのいることをも書き添えておきたい。

従ってまた、一番最後の来談者をも含めて彼らのもつこの問題というのは最早や猶予の出来ない問題であり、具体的な必要を充たすものでなければならないことは言うまでもないことだろう。

そこでこれらの問題をもつ来談者たちを窓口でまずそのままありのままの姿を許容 (アクセプト) するところのワーカーが登場することになる。ケースワークの専門用語ではインテイク・ケースワーカーというのだが、彼らのその役割は重大だ。むしろこの許容のいかに、つまりインテイクの段階での良し悪しが、問題の凡そ半部分は解消に至る道を開いたことになると言っても過言ではないからだ。まずこうして許容しておいて次に、ワーカーは彼らが苦悩している問題や訴え、さらには不平や不満など十分に話しが出来るような物理的環境ここでは相談室という個室に案内し、まず物理的な環境を整える、この二つの条件つまり先きの許容という問題を持ち、これを訴える人間と、これを聞く人間関係を調整することが必要な条件となってくる。従ってこれらの条件を整理して環境づくりに必要なワーカーの態度がそれを左右することになる。このトインビー・ホールでのしかもこうした相談室でのワーカーの態度で大いに關心したところは徹底したそれは、まず真摯さであり、同情的 (sympathetically) であるばかりか、非常に注意深さをもって来談者の訴えや不平・不満に耳を傾けて聞きとっている (listening) ことである。これもまたカウンセリングの基本的態度になるが client centred counselling では許容的態度というが、その方法は none-directive counselling である。彼の言わんとするコンプレックスの全てを、またその絶望的な状況に対してでも動ずることなく、それこそ真摯な態度で彼の全てを許容することである。このとき来談者の心理のワクにこの自分が全てを受け入れられたいという自己許容 (self-awareness) が作用し、この自分を全て受け入れてくれた者との間に人間の信頼が回復して、そのワーカーに同一化 (identify) しようとする

心理的規制が起こり始めるのである。

つまりここに至るまでのダイナミックな働きをするのがインテイク・ワーカーの役目だという教科書通りの過程に彼らが参加し働きかけてくることになるが、社会診断の欠かせないプロセスとなり、これが次いで参加する専門家の具体的な問題解決のための援助に必至なことはことわるまでもないことだと思う。

では次に何をアドバイスするのがこの専門家たちの与えるそれをいくつか整理してみることしよう。まずこれは問題の内容、複雑さによって異なるのだが、基本型としては

- (1) クライアントのニーズと社会資源との調整で、最も適当かつ満足のいくスペシャリストを紹介すること。
- (2) フォーメーション（専門的な社会資源＝施設）リストを提供すること。
- (3) 具体的な家庭訪問をサジェストすること。（家庭・病院・刑務所等々）
- (4) 専門家の適当な援助・助力をかりること。とくに（housing officer, probation officer）
- (5) 適切なガイダンスを示し、それとの連絡をとること。マリッジ・カウンセリング（マリッジ・ガイダンス）
- (6) ケースあるいはクライアントとのフォロー・アップを保つこと。とくに囚人訪問とそのホーロー。
- (7) 人間として最低の生活を保障しうる適切な社会資源を受給でき、適応性を補充するため、社会保障や健康・保健などの社会権に給するようこれを整備すること。

それでは2本の柱である Toynbee Legal Advice Centre と Toynbee Citizens' Advice Bureau について、二つのハイライト、つまり1971年のトインビー・ホール内の新プロジェクト Sunley House と精神障害者の新事業を記念して開所式に女王をお招きした年、またその5年後には、その母クイーン・マザーを迎えた1976年、これは Attlee Garden のオープンを記念したものだ。

1971年の T. L. A. C.

女王を迎えて記念式典の出来た年それはトインビー・ホールを含めて、この地区つまりタワー・ハムレット（市）ではこの二つの大きなダメツヂに見舞われた時期である。つまりその一つは、大英帝国に東パキスタンから相当数の難民が移住してきたことである。しかもこの地区にその大部分が集中したことから、異民族とのトラブル（racism）が続発して止まなかった。従ってまた、この問題がこの地区の最重点課題として取り上げられるに至ったこと。それにもう一つ、それも前者と無関係ではないが、とくに青少年の非行、成人の飲酒（alcoholism）またはドラッグによる犯罪が目立って増発してきているころだ。こうして不名誉なことだがこの地域が“Ganges Delta”と呼ばれるに至ったことなどからも十分に分かってもらえると思う。これらの問題にもトインビー・ホールは無関係ではいらなかった。むしろ強い関心をもちレデ

デントらの感受性とをもってこれらの問題に当たってきたといえる。その意味でさきの二つの「相談事業」のアドバイス部門では、その第一線でコンパットとして新しい問題と取り組まねばならなかった。

では、年間ここで扱う件数がどの位あるかを述べる。凡そ7,000件を超している。しかもそのうち1,000件余りはトインビー・ホールにて継続処理しているもので、凡そ以下に示すように内容と割合とになるうかと思う。理解の一助としてもらえれば幸いだ。

1. 家族・近隣内での葛藤	29.0%
2. 住宅問題	19.0%
3. 市民権・ナショナル権に関する情報	14.5%
4. 社会保障・保健（健康）・税金問題	14.5%
5. 就 労	10.5%
6. カンスマー（消費者援護法にもとづくトラブル）	6.5%
7. 他	6.0%

となっており、この中には相当数先きに見た東パキスタンからの移民による問題が含まれている。割合にすると凡そ3割近くもなるとおもう。なお1974年度の「トインビー年報」によるとその取り扱い件数の実数が71年より1,000件近くも減となっているが、よりその内容が明確に移民の問題に移り変わりつつあることがはっきり出ている。

例えば、第1位は契約法によるところの問題で3割を占めているが、その内3分の1は住宅の賃借をはじめとする契約法に関する件数、さらに3分の1は消費契約によるもの。第2位は家族法によるもので家族同志の地域内でのトラブルである。これは、第1位の契約法同様3割、つまり3分の1を占める割合を示しているがその間には大差はない。だがその内容においては若干家族間の葛藤や近隣の地域間の葛藤としての問題が相当数占めていることが指摘出来るかと思う。第3位、これは自動車事故あるいは労働災害に関する相談で、割合にして凡そ5分の1を占めている。つまりその多くはまさに新移住地の未知・未熟によって発生した事故で、彼らの多くは労働災害の適応さえ知らない移民たちでそれがための苦情であることをよく物語っているといえる。トインビーではこのために週に1回ないし2回ほど会議を開いて検討してきた。その結果ひとつの対応策としてトインビーの近隣地区にL.A.C.のランチ（出張所）を作ることで市民や行政等に働きかけ、ついにフルタイムの3施設を置くことが出来た。その一つは従来ベターナルグリーンにオックスホード・ハウスと称するトインビー同様あるミッション（スポンサーによるセツルメント）があったが、そこの1室をかりてそこに事務室を設けた。さらに同スピタルヒールド地域内（とくに東パキスタン移住地区）にもう一つ、ハンズベリー通りに事務室を設けた。とくに後の二つは移民問題専門のL.A.C.（相談所）としたものだ。そのためトインビーのスタッフたちは週70から80通の手紙による相談や電話での処理を受付けている。その事務処理に有効打となったことには言うに及ばない。その上、週1回ないし2回程度の夜間の相談時間を設けた。“これは夕方6時半にオープンして翌日の午後8時半”

という神話をつくり出す程の多忙ぶりであった。行政もこうした実情をかんがみタワー・ハムレット市に新たに2施設（センター：full time night borough law centre）を設けてこの方面の業務に着手した。だが当分の間はそうした公けの機関がオープンされてもそこでの不十分な取り扱いや許容不足のためにおこる利用者のフラストレーションが顕在化してきている。従ってその多くがトインビーの T. L. A. C. をたよって集ってくる。というやら残念だが行政ばなれが目立っていることは拒めない。

その他の取り扱い事件では不法行為（Tort law, case of Tort）、税金、社会保障などのケースを主としたアドミニストレーション法（Administration law）、刑法（Criminal law）等々の問題となっている。割合にすると各々6%ないし7%となっている。以上取り扱ったケースは既存の法律によって分類したものであるがその第1位を占めているものが家族法扱いのもので、凡そ3分の1はこれが占めている。先きに述べた東パキスタン移民の増加と共に同法の変更による相談・手続等々の問題で、これが首位を占めている最大の要因となっている。実際その3分の1程度は、法の改正（matrimonial affairs）によるもので純粹の法律相談というよりもマリッジガイダンスを必要とするケースといっている。

以上、前年つまり1971年の実数とその途中1974年とを比較して出したが取り扱い事件数は凡そ1,000件ほど減っている。但しそのケースの内容それ自体に多少の変化が見られる。その変化は法律の改正によるもので、それによって発生した不平・不満を訴えるもので、多くは法の適応を知らないためにおこったもの、さしずめ新しい移民がかかえた問題であることにその特徴があろう。その他取り扱い件数を減じた要因としては、同地区内に行政による法律相談センターが整備されたことにある。だが先に述べたとおり手離しでは喜べない問題がある。つまり公けの機関に対する不満があり、これをトインビー・ホールの L. A. C. を訪れて不平を持ち込む来談者の数が増えていることだ。しかるに単に行政上の対策のみに重点を置くのではなく、つまり施設や窓口を増すのではなく彼らをうけとめることにある。要するにセツルメントの必要がここにある。改めて、あまりにも人間的な問題解決過程が間違いでないことの立証がここにあるかと思う。

次いで T. C. A. B. を見ておこう。

この T. C. A. B. の特徴は、前者の法律もしくは法律に準じたケースを扱うということよりも、民事一般で、市民のよろず相談といった性格のものを引きうける窓口である。来談者のもつ問題やその内容は千差万別で、まさによろずといった感がする。それだけ市民に密着したじかの問題を扱うことにもなるのだが、前者のスペシャリスト（法律家）に対して、この T. C. B. の方は特別な訓練と専門知識とを兼ね備えた非専門家（layman）つまり素人のボランティアが参加出来る領域である。従ってまた具体的な援助方法もつめてアドバイスや指示（briefing council）によるものが多く、公的機関での不十分な受け入れによるフラストレーションだけに、セツルメント精神、つまり問題を一緒になって考えるこうしたワーカーの受容態度によって、クライアント自身が自らの問題という自覚をし、その問題の解決に自らが当るという主体的な取り組みやその姿勢を側面から支持する法である。

またこうした問題は多岐 (multifarious problems) に亘っていることは先きに指摘しておいたが、一相談者、一問題ではなく同時にいくつもの問題を複雑にからみ合っており、トインビーホールにもち込まれるころはもはや絶望的な状態に陥っていることが少なくない。例えばその主訴は、市の住宅問題クリアランスのための re-housing problem であるが、これには、たまたまクライアントが服役中の受刑者をかかえている。保護監察官のもとで家庭復帰のため家にもどって来た者だが、家族の者からは厄介者扱いされかつネグレクトされているようなケースのような場合、単に代わりの住宅を探せば問題解決になるのではない、同時にいくつかの家族調整というファミリー・ケースワークが必要となる。その他、単身者 (独身男性) に多いケースでは、現在住んでいる部屋の居心地が悪いかベッドが悪くて良く寝れない等々の訴えるケースで、引き続きフォローアップをしてみると、近くに両親が住んでいるにもかかわらず、両親との間にミゾが出来てしまって家には帰れないという、かと言って現状に甘んじてもらえない、どこか快適な場所に移りたいという。適当な場所は見つかったが金銭の問題で決意がしぶっている。家には戻れない、かと言って現在住んでいる所ではどうも落ちつかない、どこか適当なところを探してはみるものの適当なところがなく、どうしていいかわからずただひたすら苦悩しているという有様だ。まさしく境界人的苦悩 (マージナル・マン・プリジカメント Marginal man・predicament) のように複雑な問題とっていいであろう。しかも悩み抜いてどうしようもない相談者がここでは少なくないことを理解してもらえたかと思う。

さて T. C. A. B. も先きの T. L. A. C. 同様、年々取り扱い件数が減少してきている。これは実質件数が減ったのではなく、他にそれらを専門とする施設が新しく開設されたため、相談者がそちらに向いたための減である。例えば住宅相談 (Tower Hamlets housing advisory centre)・婦人一時宿泊施設 (Women aid centre)・家庭相談所 (Family advice centre)・移民総合相談所 (Joint council for welfare of Immigrants) 等々がそれだ。

扱った件数はほぼ T. L. A. C. と同様6,600人のインタビューに応じてきた。例にならってその件数を内容別に分類してみると凡そ次のようになる。

1. 家族・近隣・個人の問題	29.0%
2. 住宅・地主・借地人の賃借問題	19.0%
3. 市民権に関する一般情報	14.5%
4. 社会保障ならびに健康・保健問題	14.5%
5. 就職	10.5%
6. 消費	6.5%
7. その他	6.0%

この割合はここ数年、つまり1971年と74年との間にはそう大きな変化は見られない。前の年に比べて(4),(5)の問題がやや割合にして増加を示している程度で、但し先きにも述べたように新しい移民、つまり東パキスタンの問題が具体的な援助やアドバイスを求めてトインビー館を訪

れる来談者の数が少なくないことを物語っている。また T. C. A. B. には障害者の相談が目立っている。とくにその精神障害が主だが地域での生活に不適應で、むしろ病院で生活が適当と思われるケースを扱うことが多い。彼らの多くは家族から拒否をうけその上、少なからず地域社会からの疎外を受けた normadic な状態で T. C. A. B. を訪れるというよりは発見される、あるいはまた保護されてくるといった状態である。従ってこれらの障害者と家族に対して、市民権としての最少の生活が保障されるよう社会保障や健康サービスのもとに彼らを置き、それを受給出来るよう調整、助言 (normal rights) することになる。

従って T. C. A. B. は様々な公的機関の事務官や社会資源とのスムーズな連絡や関係を保っておく必要がある。単に社会保障や健康・保健局のみではなく、市民生活全般に亘たるような例えば Rates offices や電信電話局の事業所など multifarious business が必要である。

またこのため窓口は終日、それに週3回の夜の相談室を設けている。スタッフには数名の専門の弁護士やサイキアトリック・ケースワーカー、それに若干の篤志家からなるヘルパーを備えてこれに当たっている。

その他 T. C. A. B. が扱うケースのうち特別割合の多いのは通称“バタード・ワイフ (Battered wife)”：“家を追い出された婦人”とでも訳するのが適訳なのか“生活につかれた婦人”と訳すべきか、むしろ、筆者は後者の“生活につかれた婦人”とするが、これらのケースが少なくない。最大こうしたケースを取り扱うワーカーは、来談者の家の近くの一時収容所 (宿泊所) に連絡をとり、それにこれらの婦人を送致するか、もしくは、主にそうした業務を行なっている専門の施設 (Chiswick Women's Aid Centre) に関する資料を提供して、そこを訪れるようアドバイスをするかである。

それにもう一つ、この地区が不就労者 (失業者) のもっとも多いところの1地区となっており、この方面での活動も盛んに行われている。その主な業務は公的機関に紹介するのだが、そこでの許容・受け入れがわるかったり、または雇用者との間の葛藤による不満であったり、また、失業保険の会社と事業主とのトラブルによる問題 (しわ寄せ) や失業中の納税問題・生活費など等様々な問題を呈する。そこで T. C. A. B. のワーカーたちは来談者の訴えに対して、あくまでアドバイスを与える者としてではなく、耳を傾けてその訴えの全てを聞くという許容の態度をもって、同情的かつ忍耐深く、絶望的な来談者の訴えに耳を傾けねばならない。その後、具体的な来談者に最も適したサービスを与えるか、もしくは、彼が満足しうるような専門家のサービスを受けるようアドバイスをしたりする。

しかもこうした問題は急を要する問題で、トインビーホールの内には一時金を都合つけられるような窓口と基金を整備中である。

総じてこの T. C. A. B. を訪れる来談者たちの訴えや不平・不満から公的な機関での不十分な受け入れによる無理解があることをも合わせて記しておく必要があろう。

尚、筆者の相談をうけたケースで大変多かったのは、孫にあえない祖母（会うことを禁止されている老人）の問題である。孫の近くに住んでいながら彼らの親から会うことをつよく禁止されている老人の問題であった。老人たちは行政に会う権利の正当性を主張したり、また請願書を地方裁判所に提出する運動をはじめている。

1976 T. L. A. C.

地区内の「法律相談事業計画」以来、ここトインビー・ホールの T. L. A. C. の役割は大きくまた数多くのケースを処理してきたことは市民の知るところとなった。ただ数をこなしただけではなく、この市民のニーズに十分にこたえるよう時間や場所それにスタッフを整備してきた。とくに今日この地区がかかえた社会問題、東パキスタンの移民を含めた人々から気がねなくまた敬遠されることなく利用出来る市民の窓口となってきたことは記録していいこと柄であろう。

とくにこの問題は、前トインビーの館長、ワルター・バーミングガムが館長に就任した1972年以来、T. L. A. C. のメンバーとなり精力的にこの方面のアドバイス事業に力こぶを入れた。とくにこのアドバイス事業はただ単に法律相談に終わることなく、タワー・ハムレット市全域からここを訪れる貧民のその必要に応ずる援助で常に新しい指導者を得て、75年間のキャリアをもつこの事業として今日に至っている。もち論、無料の相談所として市館にオープンしてきたものだ。

幸い、この間、良き篤志家のエキスパート（法律家＝弁護士）やボランティアに助けられてきている。事実スタッフの数も過去10年前の倍つまり7名から16名をようすることになった。当然のことながら T. L. A. C. に持ち込まれる件数も10年前に比べて想像出来ない程増となっている。勿論、量的な問題だけではなく、そのケースの内容が、その時代時代によって変わり、しかもクライアントの持ち込む問題も多様化し、いっそう複雑化の様相を呈してきている。その多くのケースは一つには不平や不満のフラストレーションをぶつけるやり場のないクライアント（non-contentious client）の問題と、純粹に不満のケースとに別けることが出来るが、T. L. A. C. でのケースは後者の不平・不満のそれを扱うこととなる。例えば、財産の管理あるいは相続に関する問題や社会保障に対する不満、それにドラフティング・オブ・ウィル（drafting of wills）等々で、よけいに払い過ぎたとか、買い手の問題から、賃借のリベートの問題・保障料の問題等色々ある。従ってそれに応ずるスタッフは単に相談にのるという本務よりもサイドワークの方が多く、関係官庁や機関に手紙を書いたり、公文書やステイメントを用意することのほかに、実際、地方の裁判所や法律事務所を訪ねて法的手続きを代行したりもする。その他、とくに持ち込まれるケースのなかには事故処理に困って来るものが少なくない。例えば作業中の事故から交通事故、さらには公共の乗物に乗って起きた事故などで、さらに相変わらず処理順位の高いのは「家族法」によるもので離婚やその後の子供の扶養に関する問題をはじめ、家族間の葛藤など、さらには近隣とのおりの問題など、それは雇用主とのいさかいが

挙げられる。例えば契約の違いとか、早進・昇級の問題、はたまたユニオンの問題など、まさによろずなんでもここに持ち込まれてくるのが現状のようだ。そのためワーカーやスタッフはこれらの問題を整理して、最も納得のいく適切な機関に紹介する作業がその量的に相当ある。

1967. T. C. A. B.

近年ここで取り扱うケース内容がアドバイスを主としたものではない。つまり個人のもつブリデカメント（苦悩）を少しでも取り除いて問題を解決しようとなると、アドバイスが全てではない。ありとあらゆる資源・社会資源は勿論のこと、大いに人的資源の活用が問題にされるに至った。つまり「マン・パワー」である。

T. C. A. B. がかかえた最大の問題は東パキスタンの問題である。とくにこの T. C. A. B. を利用する来談者の問題とは法律や条例の変更や改正によるもので、しかもそれについての無知であったり、方法についての無知であることが多い。とくに70年代東パキスタンからやって来た難民に英語の読み書きが出来ないため起る問題である。トインビー・ホールのセトルメント事業の一つに、彼らを対象とした英語の読み書き教室を開いて教育の機会を与えている。従ってまたそれともからみ合って T. C. A. B. の移民部ではことばの問題が深刻である。まずこれから解決せねばならなかった。幸い、彼らの移住地にベンガル語を使えるボランティアのフルタイムのスタッフを用意できそれに備えた。また、しかもトラブルを起こす移住者の全ては、単に語学の問題でないことも分かってきている彼らは中央や地方の事務所に手続きに行くがその方法が複雑でめんどうくさいため、手続きをせずに戻ってきてしまう、手続き不履行による問題を起すことが少なくないことだ。従ってこれがまた問題をより一層複雑にしている。そうした来談者の問題に対して忍耐強く苦情を聞いてやり問題の整理をして行く必要がある。とくに法律上の変更を知らず手続きを行った者に対しては、アドバイスよりも実際上のトラブルがある各々の関係庁との調停をまずせねばならない問題である。その他週4ポンド75ペニー賃家を支払うのが困るとか、別なケースは夜も寝られぬと訴えてくるもの等々で、3人3様極めて現実的でしかもバラエティーに富んだ問題をかかえて飛び込んでくることがある。

とくにここ近年じり押しに割合が高くなってきているものの中に住宅問題がある。とくに地主とテナ子との間の問題がそれで凡そ5分の1をこれが占めるようになってきた。実は移住してきた難民住民をまずどこに住ませるか、その住宅が問題となる。それでなくともこの地区が住民がオーバークラウドイングしていて、どこに住ませるかがこの地区の最大の問題となっている。現状では建設事業をすすめる一方、その老朽化した狭い部屋に大家族が一緒に住まねばならぬ事情下にある。従ってそこには常に家族間のトラブルが生じすき間風があき様々な不適応症状を呈して苦情を持ち込むことになる。

しかも根本的な問題解決を試みることなく、イージーなしかもインスタントな法律の理解をしたため相互に誤解を伴ない、さらに法律知識の無知から違反を犯すことすら少なくなくより一層問題を複雑にしている。従って今のところはトインビー・ホールのある地区内に居住する移

住民の多い地区には C. B. A. のような出先機関を置いてそこに移民部を設けると同時に、行政に対してもイミгранト・アピールを行ってきている。

そこで例にならって割合の高いものからいくつかを紹介するならば、消費者の権利を守る問題も、ようやく1973年の法律改正 (The Supply of Goods Act 1973) によって、従来のようなトラブルがなくなってきた。とくに雇用間の雇用主と労働者との間の契約違反によるトラブルは T. C. A. B. で扱う件数が目立って少なくなっていることを記しておこう。

それに比べ、依然として割合の減らないのが、「家族法」に基づくもので今尚全体の5分の1を占めている。内容は財産の保管 (custody), 管理 (maintenance), それに相続の問題、夫婦共通の財産権等々、とくにこれらが問題となるのは夫婦間の調停が満足にすすまず離婚となった場合で、婦人が “deserted wife” (捨てられた妻となり), 彼女たちの権利を守るため、1969 (Divorce Reform Act of 1969) の離婚改正法により、件数が増加してきたケースの一つである。

次いで15%, これは地主とテナ子間の問題で、アドバイスや調停では済まず裁判による決着でなければ解決しないところまで進んだ深刻な問題となっている。

また10~12%, つまり10件に1件の割合で個人の災害あるいは損害に関する苦情で、とくに老人の交通事故をはじめ、公共機関による損害・災い、さらには老人以外の者では作業上の損害・労働災害に関わるもので、T. L. A. C. での事故同様、後を絶たないケースである。

その他、Small Claims Courts で処理出来る「消費者法」による苦情で、これに T. C. A. B. とは逆に最近目って処理件数が増えているものの一つである。

さらにもう一つ附言しておくとするば、この地区が東パキスタンからの移民をかかえ込んだことは何度も繰り返し述べてきたことであるが、とくに彼らが持つ金銭の問題 (マネ・プロブレム) これドトインビー・ホールの相談窓口を訪れることも少なくない。この策としては数年来より特別に新しい窓口・マネー・アドバイス (Money advice) 部門を設けて問題の処理に当たることにして来ている。相談の内容は納税の相談から保険金、それに失業保険をもらいながら僅かアルバイトによる収入があった場合等々の問題などである。現在、ここではトムソン (John Tomson) 氏らを中心に準備され今々のうちにオープンすることが出来るはこびとなろう。

現在では予約制で週1回夜開設されている。これに当るスタッフはバーケレイ社の社員のボランティアによる篤志家チームのメンバーたちである。

お わ り に

1年間という限られた留学の期間であったため、各部門をしっかりと学習してくるわけにはいかなかった。だが、トインビー・ホールの福祉の社会化運動の意図するところを体をもって体

験してきたと言えよう。ふりかえてみて、凡そ1世紀にも及ぶソーシャル・ワークの実践をもっている歴史は実に大きい、過去第1次大戦、第2次戦、セツルメントの火は消えかけたように見えたが、なんと戦火のなかから戦争のもつさまざまな矛盾をセツラーたちは主張しつづけてきたし証しをこの運動のなかから読みとることが出来る。

愛の欠乏せる時代、まさにそれは現代である。この時代を予表した P.A. ソローキンは、同時に新しい社会の生存のシステムを提唱した。端的にいつて人類を“愛する運動”である。まさにその方法にはいくつもあるに違いない。ここに報告したトインビー・ホールのそれはその一つにすぎないのであろう。但し、それを見るもの真の価値を求めている者にとっては確乎たる問題の解決プロセスだと確信している。それは“ともに生き”ようとする人々のクリスタルゼーションなのであろう。